

## 都市魅力についての一考察

愛知教育大学名誉教授 阿部 和俊 氏



### \*プロフィール

1949年福岡県生まれ。1976年名古屋大学大学院文学研究科博士課程中退。同年愛知教育大学助手。助教授、教授を経て、2013年3月退官。愛知教育大学名誉教授。著書に『日本の都市体系研究』（日本都市学会賞奥井記念賞受賞）、『先進国の都市体系研究』、『発展途上国の都市体系研究』、『20世紀の日本の都市地理学』、『世界の都市体系研究』。2009年日本地理学会賞（優秀賞）受賞。文学博士。専門分野は都市地理学。

## I はじめに

この小論の目的は、都市で開催されるコンサートを指標として、名古屋を中心に主要都市を分析することにある。コンサートは都市で享受することのできる楽しみの最も代表的なものである。つまり、代表的な都市魅力である。この小論はコンサートを通して都市の魅力を検討するということである。

都市魅力というのは一言では言い表しにくいものである。しかし、確かに存在するものであり、多くの人やものを都市にひきつける要因でもある。さまざまな分野で研究が積み重ねられてきたが、ここでは2つの先行研究を紹介したい。その後、筆者の研究成果の一端を紹介する。それらを踏まえて具体的な分析に入りたい。

## II 先行研究

### （1）清水馨八郎と服部銈二郎の『都市の魅力』

最初に、清水馨八郎と服部銈二郎による『都市の魅力』をとりあげたい。この本は1970年に鹿島出版会から刊行された。都市の魅力という、まさに魅力的だが難しいテーマに早い時期に取り組んだものとして評価されよう。

著者2人はいずれも都市地理学者である。この本は3部構成（都市の魅力・都市の魅力度・将来、都市の魅力はどこへゆく）となっている。豊富な内容を含む同書であるが、この本の一番の魅力は

第2部の「都市の魅力度」にある。とりわけ、「第1章 魅力度体温計—数字が示す6大都市の魅力」が興味深い。第2部第1章の成果を中心に紹介したい。

この章ではいくつかの指標のもとに、横浜・名古屋・京都・大阪・神戸・北九州がランク付けされている。この内容は著者たちが大都市企画管理者会議からの委託を受けて行なった結果に基づいたものである。残念ながら東京が入っていないが、あらためて算定せずとも東京はほとんど全ての項目において第1位ということなのであろう。

著者たちは6つの指標と30のデータで各都市を診断している。6つの指標とは、①基礎指数 ②成長指数 ③文化環境指数 ④消費指数 ⑤経済中心指数 ⑥生産指数 である。それぞれの指標には5項目のデータがある。したがって6指標で全30項目が含まれる。全てのデータを示す紙幅の余裕はないので、一例として、「③文化環境指数」をあげると、それは「幼児教育施設数・大学学生数・文化施設数・電話加入数・医師数」である。

具体的な操作としては、「6大都市が示す30データの数値は、相互に比較ができるように各都市の常住人口で除し、率を計算」（p114）している。

そして、「6大都市相互の数値から30データごとの平均値を計算」している。たとえば、人口1.75、人口増加11.65、幼児教育施設数0.94、百貨店売上高2.69、固定資産税4.05、生産所得3.26などである。つぎに、各指標の平均を100とする各都市の百分比を計算した。つまり、年間卸売販

売額で比較すると、横浜29.7、名古屋154.8、京都46.8、大阪294.6、神戸39.8、北九州34.4 となり、横浜と大阪の差が最大となる。これは1人あたりの数値なので、各都市の経済中心性を示し、その格差がリアルに描き出されている。

その結果、基礎指標では、大阪・京都・名古屋・横浜・神戸・北九州の順、成長指標では、横浜・名古屋・神戸・京都・大阪・北九州の順、文化環境指数では、京都・名古屋・神戸・大阪・横浜・北九州の順、消費指数では、大阪・名古屋・神戸・京都・横浜・北九州の順、経済中心指数では、大阪・名古屋・横浜・北九州・京都・神戸の順、生産指数では、大阪・横浜・名古屋・北九州・神戸・京都の順、となることを示した。

著者たちは計算した6指標30データをさらに、(Ⅰ) 基本的魅力(基礎指数と成長指数)、(Ⅱ) 社会的魅力(文化環境指数と消費指数)、(Ⅲ) 経済的魅力(経済中心指数と生産指数)に集約している。大都市の魅力は、この3つの魅力の集合であると考え、

- (Ⅰ) 基本的魅力では、横浜・名古屋・大阪・京都・神戸・北九州
- (Ⅱ) 社会的魅力では、京都・大阪・名古屋・神戸・横浜・北九州
- (Ⅲ) 経済的魅力では、大阪・名古屋・横浜・北九州・神戸・京都

の順になる、とした。

著者たちはさらに、この3つの魅力を合成した総合魅力度を測定している。その場合、(i) 3つの魅力を同一価値で集計した単純総合魅力度 (ii) 社会的魅力にウエイトをおいた総合魅力度 (iii) 経済的魅力にウエイトをおいた総合魅力度の3通りを計算している。その結果、「3通りの魅力度では、1位の大阪、2位の名古屋、5位の神戸、6位の北九州の順位は変わらないが、横浜と京都とは、3位と4位が項目によって逆転している(総合的魅力度と経済的魅力度に重点をおいた場合では、横浜が3位、社会的魅力度に重点をおいた場合では、京都が3位一引用者注)。6大都市の特徴を3つの魅力度の卓越状態によって診

断してみると、横浜は単純総合魅力度において、京都と神戸は社会重点の魅力度において、大阪と北九州は経済重点の魅力度において、名古屋は3つの魅力度の格差のないことにおいて、それぞれ特徴を示している」と指摘した。

この研究で使用された資料のほとんどは1965年前後である。したがって、現在では少し変わっていることも予想されるが、大筋において我々がこれらの都市について抱いていたイメージに近い事実が指摘されている。なによりも、都市魅力というと文化的な面に偏りがちなものを総合的に捉えられ、かつ数量化して提示していることは評価されよう。

## (2) 東海総合研究所の『中部地域を代表する名古屋の都市イメージなどに関する調査報告書』

もう1つの先行研究として、株式会社東海総合研究所(現 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社)による「中部地域を代表する名古屋の都市イメージなどに関する調査報告書」(1993)を紹介したい。これは、名古屋をはじめとする全国の主要都市を対象に都市のイメージ調査を行なったものである。

調査は「東京都及び愛知県在住の方々を対象とした無作為抽出によって4,200世帯の方を選択してアンケート調査」を行なったものである。取り上げられている都市は、東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・福岡・札幌・仙台の10都市である。

調査は23項目にわたっていて、結果をまとめたものが表1(紙幅に限りがあるので、本論の主旨と関係する、「都市の楽しみの多さ」、「盛んな芸術活動」、「自己実現できる仕事の存在」、「盛んな製造業」、「魅力的都市づくりへの意欲」、「印象に残るまちなみの存在」の6項目のみ掲載)である。点数の計算は各項目ごとに「そう思う」を1点、「そう思わない」を-1点、「どちらでもない」を0点として、各都市の各項目ごとの平均得点を算出している。

この調査目的が名古屋のイメージを描き出すこ

表1 各都市の評価結果

都市の楽しみの多さ

順位	都市名	平均得点
1	東京	0.95
2	横浜	0.75
3	大阪	0.71
4	神戸	0.50
5	名古屋	0.16
6	京都	0.14
7	札幌	0.09
8	福岡	-0.07
9	仙台	-0.24
10	広島	-0.28

盛んな芸能活動

順位	都市名	平均得点
1	東京	0.86
2	京都	0.51
3	横浜	0.50
4	大阪	0.40
5	神戸	0.35
6	札幌	-0.01
7	名古屋	-0.03
8	仙台	-0.17
9	福岡	-0.19
10	広島	-0.30

自己表現できる仕事の存在

順位	都市名	平均得点
1	東京	0.70
2	大阪	0.43
3	横浜	0.40
4	名古屋	0.14
5	神戸	0.13
6	福岡	-0.15
7	京都	-0.16
8	広島	-0.25
9	札幌	-0.29
10	仙台	-0.30

盛んな製造業

順位	都市名	平均得点
1	名古屋	0.51
2	大阪	0.31
3	横浜	0.28
4	福岡	0.22
5	広島	0.20
6	東京	0.10
7	神戸	-0.07
8	仙台	-0.11
9	札幌	-0.30
10	京都	-0.35

魅力的都市づくりへの意欲

順位	都市名	平均得点
1	神戸	0.60
2	札幌	0.54
3	横浜	0.50
4	仙台	0.32
5	京都	0.18
6	福岡	0.02
7	名古屋	0.01
8	広島	-0.07
9	東京	-0.09
10	大阪	-0.10

印象に残る町並みの存在

順位	都市名	平均得点
1	京都	0.80
2	札幌	0.80
3	神戸	0.79
4	仙台	0.48
5	横浜	0.46
6	東京	0.10
7	広島	0.07
8	大阪	0.02
9	福岡	-0.03
10	名古屋	-0.12

出典：株式会社東海総合研究所『中部地域を代表する名古屋の都市イメージなどに関する調査報告書』  
をもとに必要項目のみ筆者により抜粋

とに置かれているため、分析も名古屋が中心である。表1から明らかなことは、名古屋が第1位（掲載した6項目の中ではなく全項目で）の項目は「盛んな製造業」1つのみであり、最下位は「印象に残る街並みの存在」1つのみということである。全23項目のうち、（+）の項目は14、（-）の項目は8、（±）0が1項目である。

名古屋の工業は活発であり、製造品出荷額は多額だが、市町村別に見て第1位になったことはない。平成に入ってから4～8位の間である。この間、名古屋の製造品出荷額が東京都区部と大阪を上回ったことはない。豊田のそれは平成に入って以来名古屋よりずっと多く、ここ数年は日本1である。

そして、周知のように愛知県の製造品出荷額は平成時代を通じて都道府県別で日本一である。つまり、名古屋の「盛んな製造業」というのは、多分に豊田と愛知県の製造業の強さに対するイメージに引きずられていると言ってもいいだろう。この調査が1993年に行なわれていることを考慮すると、その感が強い。あるいは、名古屋は製造業以外に1位となるものはない、という評価の反映であるかもしれない。

この調査の総合的なまとめとして同研究所は次のように書いている。少し長いが引用してみよう。

「名古屋は首都圏や大阪市のように過密ではなく、水もまだ豊富にあり、自然からも遠くないうえに、一定水準以上の都市機能は揃っている。産

業は製造業を中心とした堅実なものが長い歴史をもって存在し、暮らしていくという点に着目すると目立った障害は少ない都市であると言える。そして今回の調査によれば、人々が都市に求めているのは、刺激や緊張よりは、豊かな自然に包まれ、ゆったりくつろげる人間的な生活の場であるという結果が得られた。そういう点から見ても、名古屋は優れたものをもつ都市であると評価できる。」

さらに、「名古屋はやはり外への情報発信が少なく、実際以上にイメージが芳しくないという結果が出ていることはかなり切実な課題をもってしているように思われる」と指摘している。この調査はもともと名古屋に焦点が置かれているために、このようなまとめになっている。上述の清水・服部の著書が客観的に各都市の都市魅力を評価することに力点が置かれていたのに対し、この報告書は「イメージ」という主観的な点からの分析であるが、これも都市魅力を描き出す1つの方法であり、得られた結果は興味深い。

### (3) 筆者による「来日外国人アーティストの公演日程からみた地域間・都市間比較」

最後に筆者自身が行なった分析について紹介したい。筆者は1992年に「来日外国人アーティストの公演日程からみた地域間・都市間比較」という論文を『地理学評論』(65A-12)に発表した。以下はその抜粋である。

使用した資料は、情報誌『ぴあ』(ぴあ株式会社)の首都圏版・中部版・関西版、『シティ情報ふくおか』(株式会社プランニング秀巧社)、『STAGE GUIDE』(株式会社ステージガイド札

幌)である。『シティ情報ふくおか』の収録地域は沖縄を除く九州全域と山口県であり、『STAGE GUIDE』の収録地域は北海道全域である。したがって、分析の範囲は北海道、関東地方と山梨県(以下、首都圏とする)、愛知・岐阜・三重・静岡各県(以下、東海圏とする)、三重県を除く近畿地方(以下、関西圏とする)、沖縄県を除く九州地方と山口県である。

東北、北陸、中国、四国地方は分析の対象から除かれている。主要都市としては、仙台、新潟、金沢、広島、高松が除かれている。その理由は、これらの地方や都市をカバーする情報誌を1年間を通して入手できなかったからである。

筆者の研究は1990年度に来日した外国人アーティストがどのように日本国内で公演したのか、ということ进行分析したものである。表2は1990年度に来日した外国人アーティストの公演を地域別にまとめたものである。この年度、来日外国人アーティストは1,063組(1人での来日もオーケストラなどの来日も1組とカウント)である。このうち「クラシック音楽」が449組(42.2%)、「クラシック以外の音楽」が536組(50.5%)、「演劇など」が78組(7.3%)である。

公演数はいずれも首都圏が最多で、以下、関西圏(首都圏の71.3%)、東海圏(同34.1%)、山口県を含む九州地方(同16.3%)、北海道地方(同5.9%)と続く。首都圏の優位度は圧倒的である。関西圏はいずれも首都圏に次ぐ公演数であるが、対首都圏比は「クラシック以外の音楽」が81.6%で最も多い。「クラシック音楽」は59.8%で、その差は大きい。この傾向はいずれの地域において

表2 1990年度における来日アーティストの講演の地域別内訳

地域	合計	首都圏	関西圏	東海圏	九州地方 (山口県を含む)	北海道地方
来日外国人アーティスト	1063	933	665	318	152	55
内 クラシック音楽	449	391	234	90	60	8
内 クラシック以外の音楽	536	467	381	196	79	40
内 演劇など	78	75	50	32	13	7
首都圏を100.0とした数値 (順位は上段と同じ)		100.0	71.3	34.1	16.3	5.9
		100.0	59.8	23.0	15.3	2.0
		100.0	81.6	42.0	16.9	8.6
		100.0	66.7	42.7	17.3	9.3

各地域の公演数はアーティストごとに集計されたものであり、全体の合計数は各地域の公演数を単純に集計した数値と異なる



表3 主要都市別・県別・日数別公演状況

県・都市	東京 (23区)	横浜	川崎	大宮	東京都 神奈川県 千葉県 埼玉県	大阪	京都	神戸	大阪府 京都府 兵庫県 滋賀県	名古屋	愛知県	福岡	札幌
内訳													
1日	320	132	19	22	219	429	94	60	84	284	19	112	51
2日	224	9	11		5	100	4	3	1	21		3	3
3日	121	3			1	19				1		2	1
4日	58	3				1				1		2	
5日	51					1							
6日	36	3				18						15	
7日以上	36	1	1			5				1		2	
合計	846	151	31	22	225	573	98	63	85	308	19	136	55
東京(23区)を100.0	100.0	17.8	3.7	2.6	26.6	67.7	11.6	7.4	10.0	36.4	2.2	16.1	6.5
クラシック音楽の合計	366	42		6	101	188	42	20	34	85	6	47	8
東京(23区)を100.0	100.0	11.5	0.0	1.6	27.6	51.4	11.5	5.5	9.3	23.2	1.6	12.8	2.2
クラシック以外の音楽の合計	413	88	30	12	73	339	42	32	40	191	7	76	39
東京(23区)を100.0	100.0	21.3	7.3	2.9	17.7	82.1	10.2	7.7	9.7	46.2	1.7	18.4	9.4
演劇などの合計	67	21	1	4	51	46	14	11	11	32	6	13	8
東京(23区)を100.0	100.0	31.3	1.5	6.0	76.1	68.7	20.9	16.4	16.4	47.8	9.0	19.4	11.9

東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県には、東京23区・横浜・川崎・大宮は含まれていない  
 大阪府・京都府・兵庫県・滋賀県には大阪・京都・神戸は含まれていない  
 愛知県には名古屋は含まれていない

表4 公演の都市（圏）パターン

都市圏・都市	合計	東京圏 のみ	大阪圏 のみ	東京圏 と大阪圏 のみ	東京圏 大阪圏 名古屋	東京圏 大阪圏 福岡	その他
クラシック音楽	449 100.0	148 33.0	32 7.1	74 16.5	23 5.1	9 2.0	163 36.3
クラシック以外の音楽	536 100.0	122 22.8	56 10.4	94 17.5	102 19.0	17 3.2	145 27.1
演劇など	78 100.0	20 25.6	0 0.0	18 23.1	10 12.8	0 0.0	30 38.5
合計	1063 100.0	290 27.3	88 8.3	186 17.5	135 12.7	26 2.4	338 31.8

東京圏・・・東京23区・横浜・川崎・大宮      大阪圏・・・大阪・京都・神戸

も指摘される。首都圏の特徴は「クラシック音楽」の公演数の多さである。

表3は公演状況を主要都市別・県別・日数別に示したものである。東京23区での「クラシック音楽」は366公演であるのに対して、大阪は188（東京23区の51.4%）、名古屋は85（同23.2%）である。大阪は関西圏（59.8%）でみるよりも対東京比は低下する。このことは、京都と神戸とともに補完しあっていることを想起させる（3市合計では250で対東京の68.3%になる）。もちろん、東京23区の場合も横浜や大宮（現さいたま市）などが東京23区を補完している。この点、名古屋は周囲に有力な都市がないので、相互補完性は弱い。名古屋を除いた愛知県での公演数は6にすぎない。

その表3で公演状況を主要都市別の公演日数からを見ると、多くの場合、1日のみの公演である。東京23区は846公演のうち、「1日のみ」が320（37.8%）なのに対して「2日以上」は526（62.2

%）にもなる。大阪は573公演のうち「1日のみ」が429（74.9%）に対し、「2日以上」は144（25.1%）である。名古屋は「1日のみ」が284（92.2%）、「2日以上」は24（7.8%）にすぎない。

東京23区で2日以上の公演が多いということは、言うまでもなく東京（都市圏）の人は公演鑑賞日を選択できる自由度が高いということである。

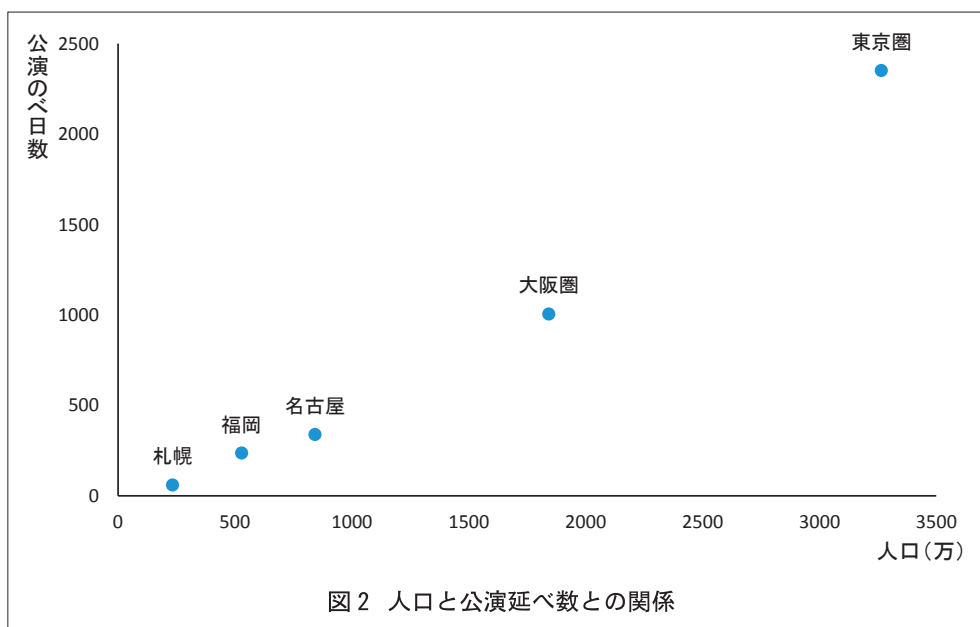
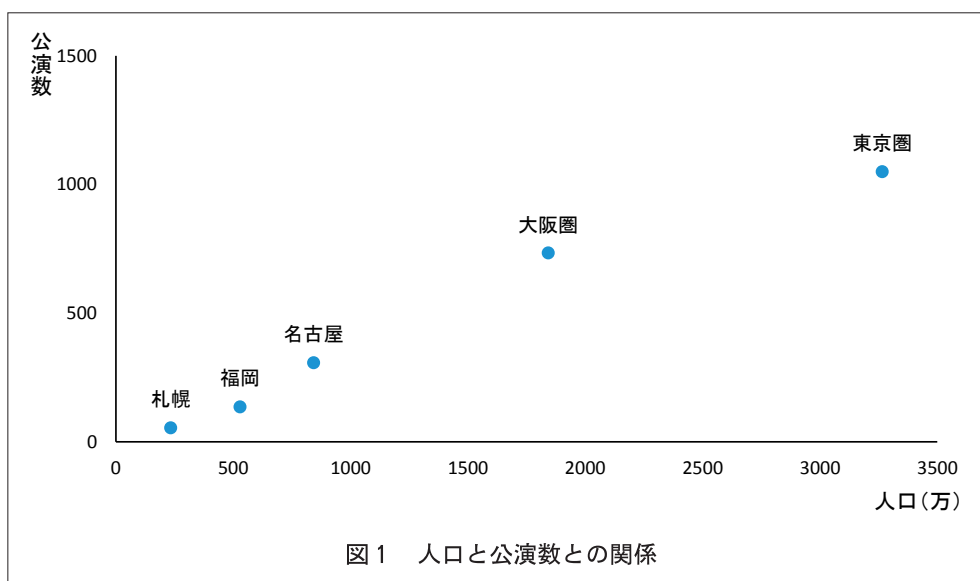
表4は公演の都市（圏）パターンをまとめたものである。「東京圏のみ」での公演は全体で290（27.3%）であるのに対して、「大阪圏のみ」というのは88（8.3%）にすぎない。「東京圏と大阪圏」の2大都市圏のみ公演というパターンは「東京圏のみ」よりも少ない。

話題はやや変わるが、1991年11月に「来春から早朝の下りスーパーひかり1本が名古屋を素通り」と発表されて話題になった。いわゆる「名古屋とばし」である。これをきっかけにさまざまな催し(※1)が名古屋をとばすということが指摘された。

(※1) たとえば、同日の朝日新聞には、「新幹線以外まだある！」という見出しで「コンサート」「ファッション」「生活情報店」の名古屋とばしの例が報告されている。「コンサート」の例では、「1987年、88年のマイケル・ジャクソン、87年と昨年（1990年…引用者注）の Madonna、そして今年（1991年…引用者注）のMCハマー（現在はハマー）。この超大物歌手3人の来日コンサートは、東京、大阪、千葉、横浜などで開かれたが、名古屋には来なかった」とある。

表5 東京圏・首都圏と大阪圏・関西圏での公演のないアーティスト数

内訳	都市圏				
	合計	東京圏で公演されないもの	首都圏で公演されないもの	大阪圏で公演されないもの	関西圏で公演されないもの
クラシック音楽	449 100.0	71 15.8	58 12.9	222 49.4	215 47.9
クラシック以外の音楽	536 100.0	72 13.4	69 12.9	162 30.2	155 28.9
演劇など	78 100.0	8 10.3	3 3.8	28 35.9	28 35.9
合計	1063 100.0	151 14.2	130 12.2	412 38.8	398 37.4



「名古屋とばし」の観点から見ると「東京圏と大阪圏のみ」公演と「東京圏・大阪圏・福岡」で公演というパターンが問題となる。表4からわかるように、前者は3部門合計で186（17.5%）であるが、後者は26（2.4%）にすぎない。

名古屋の立場にたてば、「名古屋のみ」で公演というのがベストであるが、それは皆無である。したがって、「東京圏・大阪圏・名古屋」というパターンが望ましいわけだが、それは多いとは言えないものの、「東京圏・大阪圏・福岡」よりは

かなり多いことが指摘できた。「演劇など」は前者が10であったのに対し、後者は0である。名古屋は以下に示すように人口規模にそれなりに応じた公演が行なわれていた。名古屋とばしというのは、「いわゆる大物が名古屋をとばす」ことがある（多い）ということの印象が強いことによる。

表5は東京圏・首都圏と大阪圏・関西圏で公演がなかったケースである。当然のことながら、東京圏・首都圏で公演されなかったケースは大阪圏・関西圏よりも少なかったことがわかる。

では、以上のような結果の要因はどこにあるのであろうか。最も重要な要因は人口であろう。人口の多集積は多くの、そして希少な公演を可能にする。図1は人口と公演数との関係、図2は人口と公演延べ数との関係を示したものである。両指標は強い相関関係があることがわかる。つまり、全公演数は人口規模に相関しつつ、首都圏はクラシック音楽の公演が飛びぬけて多いということになる。

以上の諸研究を踏まえて、3大都市圏を対象にコンサートを指標に都市魅力を検討していく。

### Ⅲ コンサートを指標とした 都市魅力の検討

以下の分析においては、市については大阪・名古屋のように「市」をつけていない。また、1都3県（東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県）をもって首都圏、2府1県（大阪府・京都府・兵庫県）をもって京阪神圏、東海地方（愛知県・岐阜県・三重県）をもって名古屋圏としている。

#### （1）会場（ホール）数の状況

コンサートを行なうには会場やホール（以下、会場とする）が必要である。まず、会場の状況から検討していく。指標としての会場は、図書館・病院・大学などの数とともに、これまでしばしば取り上げられてきた。いわばハード面からの都

市魅力である。資料としては『演奏年鑑』（公益社団法人日本演奏連盟発行）を使用する。この年鑑は「（毎年）1月から12月までに全国で開催された演奏会のデータを収集、調査して統計資料としてまとめたもののほか、演奏に関わるさまざまな情報を子細にわたり調査し、掲載している」ものである。1975年に第1巻が出されている。

この小論では、会場については1990年・1995年・2000年・2005年・2010年・2014年を取り上げる。コンサートの開催という観点から、会場といえは「コンサート専用建造された施設」と受け取られるかもしれないが、ここでいう会場とは必ずしもコンサート専用施設ではなく、「コンサートが開催された施設」という意味である。『演奏年鑑』は「クラシック音楽の演奏会・オペラ等の上演を行い、演奏会記録のために資料提供にご協力いただいた全国の会館及びホール」と定義している。

表6は1990年・1995年・2000年・2005年・2010年・2014年の首都圏・京阪神圏・愛知県、東京23区・横浜・さいたま<sup>(※2)</sup>・千葉・大阪・京都・神戸、名古屋の会場数を示したものである。この1都2府5県における会場数の合計は、1990年：277、1995年：305、2000年：326、2005年：438、2010年476、2014年：480である。1990年を100.0とすると、1995年：110.1、2000年：117.7、2005年：158.1、2010年：171.8、2014年：173.3である。近年における増加は著しい。

首都圏、京阪神圏、愛知県でみると、1990年では京阪神圏は首都圏の51.8%、愛知県は同17.0%であったが、2014年では同55.8%、同19.3%に微増している。都府県別にみると、各年次最多会場数は東京都である。1990年の86から2014年では126になった。ほぼ1.5倍である。大阪府は1.7倍に、愛知県は1.9倍になった。神奈川県・埼玉県・愛知県の会場数は各年次ほぼ同数である。兵庫県もだいたい同じであるが、2014年では62と多くなっている。千葉県と京都府の会場数はやや少ないが、2000～2014年にかけて千葉県の会場数は急増した。

(※2) さいたま市は2001年5月1日に浦和市・大宮市・与野市が合併して誕生した。ここでは、1990年・1995年・2000年については、浦和・大宮・与野の範囲で集計している。

表6 会場・ホール数

	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2014年
東京都	86 (100.0)	97 (100.0)	103 (100.0)	117 (100.0)	126 (100.0)	126 (100.0)
内 23区	70 (81.4)	80 (82.5)	80 (77.7)	88 (75.2)	93 (73.8)	93 (73.8)
神奈川県	29 (100.0)	33 (100.0)	37 (100.0)	49 (100.0)	51 (100.0)	52 (100.0)
内 横浜	6 (20.7)	7 (21.2)	10 (27.0)	15 (30.6)	17 (33.3)	18 (34.6)
埼玉県	28 (100.0)	31 (100.0)	32 (100.0)	47 (100.0)	55 (100.0)	53 (100.0)
内 さいたま	4 (14.3)	5 (16.1)	5 (15.6)	8 (17.0)	10 (18.2)	10 (18.9)
千葉県	21 (100.0)	22 (100.0)	24 (100.0)	37 (100.0)	43 (100.0)	43 (100.0)
内 千葉	2 (9.5)	2 (9.1)	2 (8.3)	6 (16.2)	8 (18.6)	8 (18.6)
首都圏合計	164	183	196	250	275	274
大阪府	38 (100.0)	44 (100.0)	46 (100.0)	59 (100.0)	64 (100.0)	64 (100.0)
内 大阪	16 (42.1)	20 (45.5)	19 (41.3)	25 (42.2)	22 (34.4)	22 (34.4)
京都府	17 (100.0)	15 (100.0)	15 (100.0)	21 (100.0)	24 (100.0)	27 (100.0)
内 京都	9 (52.9)	7 (46.7)	7 (46.7)	12 (57.1)	14 (58.3)	15 (55.6)
兵庫県	30 (100.0)	33 (100.0)	34 (100.0)	59 (100.0)	62 (100.0)	62 (100.0)
内 神戸	3 (10.0)	3 (9.1)	4 (11.8)	10 (16.9)	11 (17.7)	12 (19.4)
京阪神圏合計	85	92	95	139	150	153
愛知県	28 (100.0)	30 (100.0)	35 (100.0)	49 (100.0)	51 (100.0)	53 (100.0)
内 名古屋	10 (35.7)	9 (30.0)	11 (31.4)	16 (32.7)	15 (29.4)	15 (28.3)
合計	277	305	326	438	476	480

注)さいたまの数はさいたま市の範囲で集計

都市単位でみると、各年次最も多いのは東京23区である。各年次2位はいずれも大阪であり、3位は1990年・1995年・2000年は名古屋だったが、2010年に横浜が多くなった。2014年では3位は横浜(18)になり、京都(15)と名古屋(15)がこれに続く。

( )内の数値はこれら中心都市への集中度である。東京23区は常に飛びぬけて高い。これに京都と大阪が続く。名古屋はこれら3都市に続いてきたが、2014年では横浜に抜かれた。

表6からさらに東京23区・大阪・名古屋への集中度が低下傾向にあるのに対して、横浜・さいたま・千葉・神戸への集中度は上昇傾向にあることがわかる。上述のことと合わせると、会場は都市圏の中心都市たる東京23区と大阪で増えつつもその外周地域、とくに県庁所在都市での増加が大きかったことが指摘できる。

このことは、2000~2014年にかけて東京都では23会場の増加であったのに対し、神奈川県・埼玉県・千葉県では合計55会場の増加であったこと、同期間、大阪府では18会場の増加であったのに対し、京都府と兵庫県では合計40会場の増加であったことをみても首肯できよう。

ちなみに、1990年では東京23区の会場数(70)は首都圏(164)の42.7%、大阪(16)は京阪神圏(85)の18.8%であったのに対して、2014年では東京23区(93)は首都圏(274)の33.9%、大阪(22)は京阪神圏(153)の14.4%に低下した。

このことをみても外周地域での会場増加が大きかったことがわかる。なお、この会場数というのは前述したように、「演奏が行なわれた会場」の数ということであって、新築された会場が多かったということではないことを再確認しておきたい。

## (2) 公演会数の状況

続いて公演会の状況について検討する。前節の施設数がハード面からの都市魅力の検討であったのに対して、これはソフト面からの都市魅力の検討である。この場合、分析のレベルとして、都市・都府県・都市圏の3つが考えられる。『演奏年鑑』の集計は都道府県単位が基本なので、分析はまず東京都・大阪府・愛知県を中心に行なう。会場については1990年も取り上げたが、『演奏年鑑』の1991年版は集計範囲が異なるので、分析は1995年・2000年・2005年・2010年・2014年について行う。

表7はこの5年次の東京都・大阪府・愛知県、表8は首都圏・京阪神圏・名古屋圏で行なわれたコンサートの総数であり、図3は東京都と首都圏の総数を100.0として、それをグラフ化したものである。表9・10・11・12・13はこの3年次に東京都・大阪府・愛知県で行なわれた公演を「オーケストラ」、「室内楽」、「ピアノ」、「歌劇」、「声楽(独唱)」、「その他」のジャンルに分け、日本人演奏家と来日外国人演奏家別に集計したものである。

表7と図3から公演総数について見ていこう。年次による変動が大きいが、公演会の総数は全体



表7 東京都・大阪府・愛知県における公演数

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	1995年	3,346 (100.0)	842 (25.2)	531 (15.9)
	2000年	3,272 (100.0)	746 (22.8)	534 (16.3)
	2005年	3,284 (100.0)	794 (24.2)	527 (16.0)
	2010年	3,740 (100.0)	810 (21.7)	812 (21.7)
	2014年	3,675 (100.0)	650 (17.7)	730 (19.9)
来日外国人演奏家	1995年	832 (100.0)	262 (31.5)	161 (19.4)
	2000年	793 (100.0)	163 (20.6)	130 (16.4)
	2005年	853 (100.0)	188 (22.0)	170 (19.9)
	2010年	844 (100.0)	139 (16.5)	170 (20.1)
	2014年	815 (100.0)	141 (17.3)	179 (22.0)
合計	1995年	4,178 (100.0)	1,104 (26.4)	692 (16.6)
	2000年	4,065 (100.0)	909 (22.4)	664 (16.3)
	2005年	4,137 (100.0)	982 (23.7)	697 (16.8)
	2010年	4,584 (100.0)	949 (20.7)	982 (21.4)
	2014年	4,490 (100.0)	791 (17.6)	909 (20.2)

資料:『演奏年鑑』

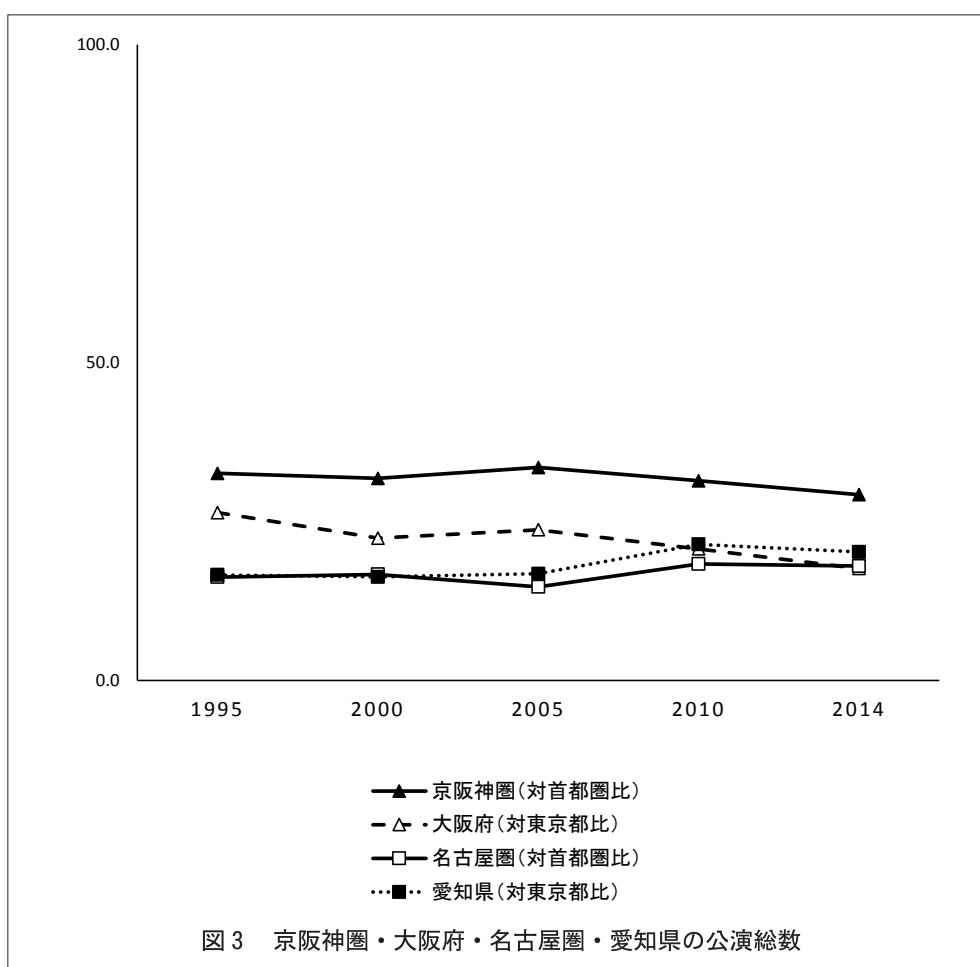


図3 京阪神圏・大阪府・名古屋圏・愛知県の公演総数

的傾向として1995～2000年にかけていずれも減少したこと、2000～2010年にかけては東京都と愛知県では増加したが、2005～2010年にかけて大阪府では減少したこと、2010～2014年にかけてさらに減少したことがわかる。

1995～2014年で見ると、東京都と愛知県では増加したが、大阪府では減少したことがわかる。2014年は1995年の71.6%でしかない。大阪府は

2010年には愛知県に追い越された。1995年では愛知県の1.6倍であったものが、2014年では87.0%になっている。

具体的には、東京都では公演数は1995～2000年にかけて113減少したが、2000～2014年では425増加した。愛知県では1995～2000年にかけて28減少したが、2000～2014年にかけて245増加した。大阪府では1995～2000年にかけて195減少し、さら

表 8 首都圏・京阪神圏・名古屋圏における公演数

	首都圏(1都3県)	京阪神圏(2府1県)	名古屋圏(東海地方)	
日本人演奏家	1995年	4,346 (100.0)	1,368 (31.5)	664 (15.3)
	2000年	4,090 (100.0)	1,329 (32.5)	681 (16.7)
	2005年	4,480 (100.0)	1,573 (35.1)	628 (14.0)
	2010年	5,042 (100.0)	1,633 (32.4)	935 (18.5)
	2014年	4,868 (100.0)	1,437 (29.5)	863 (17.7)
来日外国人演奏家	1995年	1,034 (100.0)	385 (37.2)	211 (20.4)
	2000年	1,036 (100.0)	300 (29.0)	174 (16.8)
	2005年	1,213 (100.0)	335 (27.6)	210 (17.3)
	2010年	1,092 (100.0)	294 (26.9)	189 (17.3)
	2014年	1,033 (100.0)	287 (27.8)	199 (19.3)
合計	1995年	5,380 (100.0)	1,753 (32.6)	875 (16.3)
	2000年	5,126 (100.0)	1,629 (31.8)	855 (16.7)
	2005年	5,693 (100.0)	1,908 (33.5)	838 (14.7)
	2010年	6,134 (100.0)	1,927 (31.4)	1,124 (18.3)
	2014年	5,901 (100.0)	1,724 (29.2)	1,062 (18.0)

1都3県:東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県  
 2府1県:大阪府・京都府・兵庫県  
 東海地方:愛知県・岐阜県・三重県

に2000～2014年にかけて118減少した。日本人演奏家・来日外国人演奏家のいずれも減少した。前者については、2000年は1995年の88.6%、2014年は1995年の77.2%である。後者については、2000年は1995年の62.2%、2014年は1995年の53.8%である。

東京都が日本人演奏家では、同期間97.8%、109.8%、来日外国人演奏家では同期間95.3%、98.0%、愛知県が日本人演奏家では、同期間100.6%、137.5%、来日外国人演奏家では同期間80.7%、111.2%であったのは大きく異なる。2014年では、大阪府は日本人演奏家・来日外国人演奏家のいずれにおいても愛知県より少なくなっている。大阪府の減少は著しい。

日本人演奏家と来日外国人演奏家を合計した東京都の公演総数を100.0とすると、次のようになる。

1995年	東京都：大阪府：愛知県 =100.0：26.4：16.6
2000年	東京都：大阪府：愛知県 =100.0：22.4：16.3
2005年	東京都：大阪府：愛知県 =100.0：23.7：16.8
2010年	東京都：大阪府：愛知県 =100.0：20.7：21.4
2014年	東京都：大阪府：愛知県 =100.0：17.6：20.2

日本人演奏家と来日外国人演奏家とで分けてみ

ると、1995年の日本人演奏家では大阪府は東京都の25.2%、愛知県は同15.9%、2000年では大阪府は東京都の22.8%、愛知県は同16.3%、2014年では大阪府は東京都の17.7%、愛知県は同19.9%である(表7)。

1995年の来日外国人演奏家では大阪府は東京都の31.5%、愛知県は19.4%であったが、2000年では大阪府は20.6%、愛知県は16.4%、2014年では大阪府は17.3%、愛知県は22.0%となった。全体的に、大阪府の公演数は絶対数でも対東京都比でも減少低下傾向であるのに対して、愛知県は増加上昇傾向にあり、2014年では大阪府を上回るようになった。

しかし、この問題は広域的に捉える必要がある。中心都市での公演は中心都市の居住者のみが享受するわけではない。また、前章で指摘したように近年の都市圏の拡大から周辺都市での会場の充実が著しい。当然、中心都市の居住者も周辺での公演を楽しむことができる。都市圏は交通網が発達しているため、他都市での公演を楽しむことは容易である。このメリットは大きい。

表8は公演総数を首都圏・京阪神圏・名古屋圏で示したものである。この5年次いずれも首都圏の公演数が最多である。京阪神圏はその30%前後であるが低下傾向にあり、名古屋圏は増加傾向にあり10%台後半である。

少し細かくなるが、都府県単位での結果と比べてみると、2014年の京阪神圏の対首都圏比は、大

阪府の対東京都比と比べるといずれも高いことがわかる。たとえば、全公演数の京阪神圏の対首都圏比は29.2%であるが、これは大阪府の対東京都比の17.6%（表7）に比べると11.6ポイントも高い。

反対に2014年の名古屋圏の対首都圏比は全公演数で18.0%であるが、愛知県対東京都比の20.2%（表7）に比べると2.2ポイントも低い。京阪神圏は広域都市圏のメリットが生かされているが、名古屋圏はそれほどでもないことがわかる。

京阪神圏は名古屋圏を上回るが、名古屋圏の対首都圏比が上昇傾向にあるのに対して京阪神圏は低下傾向にあることは指摘しておかなくてはならない。

首都圏と京阪神圏の日本人演奏家の公演数は1995～2000年にかけて一端減少するが、2005・2010年では増加し、2010～2014年では少し減少している。名古屋圏は1995～2000年にかけて増加するが、2005年では減少する。2010年に大きく増加したが、2014年では少し減少している。1995～2014年の期間で見ると増加してきたことがわかる。

来日外国人演奏家の公演数についてみると、首都圏は大きな変化はないが京阪神圏は減少し続けている。名古屋圏は1995～2000年では減少するが、減少を続けた京阪神圏に比べて微増した。名古屋圏はこの19年間対首都圏比は20%前後を維持しているのに対して京阪神圏は低下傾向にあったことが指摘できる。

（3）ジャンル別の状況

さらに、ジャンル別に細かい分析をしていこう。表9・10・11・12・13はこの5年次に東京都・大阪府・愛知県で行なわれた公演を「オーケストラ」、「室内楽」、「ピアノ」、「歌劇」、「声楽（独唱）」、「その他」について、日本人演奏家と来日外国人演奏家とに分けて集計したものである。いずれのジャンルにおいても東京都が最も多い。年次によるばらつきはあるが、「室内楽」や「歌劇」がとくに差が大きい。

大阪府と愛知県での公演をジャンル別にみると、

表9 公演数の状況（1995年）

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	オーケストラ	689 (100.0)	215 (31.2)	125 (18.1)
	室内楽	413 (100.0)	71 (17.2)	40 (9.7)
	ピアノ	412 (100.0)	123 (29.9)	68 (16.5)
	歌劇	118 (100.0)	27 (22.9)	31 (26.3)
	声楽(独唱)	314 (100.0)	90 (28.7)	71 (22.6)
	その他	1,400 (100.0)	316 (22.6)	196 (14.0)
小計(A)		3,346 (100.0)	842 (25.2)	531 (15.9)
来日外国人演奏家	オーケストラ	136 (100.0)	79 (58.1)	49 (36.0)
	室内楽	172 (100.0)	30 (17.4)	25 (14.5)
	ピアノ	152 (100.0)	38 (25.0)	21 (13.8)
	歌劇	51 (100.0)	6 (11.8)	5 (9.8)
	声楽(独唱)	63 (100.0)	30 (47.6)	12 (19.0)
	その他	258 (100.0)	79 (30.6)	49 (19.0)
小計(B)		832 (100.0)	262 (31.5)	161 (19.4)
合計(A+B)		4,178 (100.0)	1,104 (26.4)	692 (16.6)

表10 公演数の状況（2000年）

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	オーケストラ	624 (100.0)	201 (32.2)	109 (17.5)
	室内楽	360 (100.0)	72 (20.0)	59 (16.4)
	ピアノ	447 (100.0)	124 (27.7)	92 (20.6)
	歌劇	198 (100.0)	16 (8.1)	17 (8.6)
	声楽(独唱)	296 (100.0)	49 (16.6)	36 (12.2)
	その他	1,347 (100.0)	284 (21.1)	221 (16.4)
小計(A)		3,272 (100.0)	746 (22.8)	534 (16.3)
来日外国人演奏家	オーケストラ	167 (100.0)	38 (22.8)	27 (16.2)
	室内楽	137 (100.0)	34 (24.8)	19 (13.9)
	ピアノ	93 (100.0)	18 (19.4)	21 (22.6)
	歌劇	73 (100.0)	12 (16.4)	8 (11.0)
	声楽(独唱)	47 (100.0)	8 (17.0)	5 (10.6)
	その他	276 (100.0)	53 (19.2)	50 (18.1)
小計(B)		793 (100.0)	163 (20.6)	130 (16.4)
合計(A+B)		4,065 (100.0)	909 (22.4)	664 (16.3)

表11 公演数の状況（2005年）

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	オーケストラ	602 (100.0)	200 (33.2)	88 (14.6)
	室内楽	440 (100.0)	78 (17.7)	37 (8.4)
	ピアノ	543 (100.0)	114 (21.0)	70 (12.9)
	歌劇	244 (100.0)	23 (9.4)	20 (8.2)
	声楽(独唱)	301 (100.0)	91 (30.2)	57 (18.9)
	その他	1,154 (100.0)	288 (25.0)	255 (22.1)
小計(A)		3,284 (100.0)	794 (24.2)	527 (16.0)
来日外国人演奏家	オーケストラ	166 (100.0)	36 (21.7)	40 (24.1)
	室内楽	146 (100.0)	22 (15.1)	29 (19.9)
	ピアノ	150 (100.0)	39 (26.0)	17 (11.3)
	歌劇	80 (100.0)	11 (13.8)	12 (15.0)
	声楽(独唱)	51 (100.0)	12 (23.5)	8 (15.7)
	その他	260 (100.0)	68 (26.2)	64 (24.6)
小計(B)		853 (100.0)	188 (22.0)	170 (19.9)
合計(A+B)		4,137 (100.0)	982 (23.7)	697 (16.8)

表12 公演数の状況（2010年）

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	オーケストラ	632 (100.0)	226 (35.8)	147 (23.3)
	室内楽	547 (100.0)	74 (13.5)	115 (21.0)
	ピアノ	669 (100.0)	127 (19.0)	91 (13.6)
	歌劇	204 (100.0)	25 (12.3)	22 (10.8)
	声楽(独唱)	434 (100.0)	51 (11.8)	84 (19.4)
	その他	1,254 (100.0)	307 (24.5)	353 (28.1)
小計(A)		3,740 (100.0)	810 (21.7)	812 (21.7)
来日外国人演奏家	オーケストラ	140 (100.0)	25 (17.9)	32 (22.9)
	室内楽	125 (100.0)	18 (14.4)	29 (23.2)
	ピアノ	194 (100.0)	17 (8.8)	33 (17.0)
	歌劇	42 (100.0)	1 (2.4)	4 (9.5)
	声楽(独唱)	58 (100.0)	7 (12.1)	6 (10.3)
	その他	285 (100.0)	71 (24.9)	66 (23.2)
小計(B)		844 (100.0)	139 (16.5)	170 (20.1)
合計(A+B)		4,584 (100.0)	949 (20.7)	982 (21.4)

表13 公演数の状況（2014年）

		東京都	大阪府	愛知県
日本人演奏家	オーケストラ	604 (100.0)	183 (30.3)	121 (20.0)
	室内楽	467 (100.0)	69 (14.8)	73 (15.6)
	ピアノ	571 (100.0)	72 (12.6)	115 (20.1)
	歌劇	216 (100.0)	29 (13.4)	17 (7.9)
	声楽(独唱)	570 (100.0)	64 (11.2)	101 (17.7)
	その他	1,247 (100.0)	233 (18.7)	303 (24.3)
小計(A)		3,675 (100.0)	650 (17.7)	730 (19.9)
来日外国人演奏家	オーケストラ	132 (100.0)	39 (29.5)	24 (18.2)
	室内楽	176 (100.0)	17 (9.7)	28 (15.9)
	ピアノ	167 (100.0)	22 (13.2)	29 (17.4)
	歌劇	24 (100.0)	2 (8.3)	4 (16.7)
	声楽(独唱)	83 (100.0)	15 (18.1)	18 (21.7)
	その他	233 (100.0)	46 (19.7)	76 (32.6)
小計(B)		815 (100.0)	141 (17.3)	179 (22.0)
合計(A+B)		4,490 (100.0)	791 (17.6)	909 (20.2)

1995年では日本人演奏家の「歌劇」のみ愛知県の方が多かったが、2000年では、これに来日外国人演奏家の「ピアノ」が加わり、2014年では、日本人演奏家の「オーケストラ」、「歌劇」、来日外国人演奏家の「オーケストラ」以外は全て愛知県が上回るようになった。

少し細かく見ると、東京都では日本人演奏家の「オーケストラ」が減少したものの、ほかには増加したこと、来日外国人演奏家の「歌劇」は2014年において大きく減少したものの、「声楽（独唱）」の増加が全体の微増に貢献した。

大阪府では1995～2000～2014年で微増したジャンルもあるが、いずれも減少が大きかった。たとえば、日本人演奏家の「オーケストラ」は215→201→183と減少を続けた。来日外国人演奏家の公演数は2000～2014年にかけて持ち直したジャンルもあるが、全体的に減少し、2014年の公演数（141）は1995年の公演数（262）の53.8%である。

愛知県における日本人演奏家の「歌劇」、「オーケストラ」は減少傾向であるが、「室内楽」、「ピアノ」は増加を続け、「声楽（独唱）」は1995～2014年にかけて減少したものの、2000～2014年では3倍になった。来日外国人演奏家ではジャンルによる変動もあるが、1995～2000年にかけて減少し、2000～2014年にかけて増加に転じた。

以上のことをまとめると、ジャンルによる差はあるが、全体的に1995～2000年にかけて減少、2000～2014年にかけて増加傾向にあることが指摘できた。都府県別にみると、東京都と愛知県は全体的な傾向と一致するが、大阪府は一貫して減少傾向にあることを指摘できた。

#### （４）都市別公演会数の状況

続いて都市別公演会数について検討する。既述したように『演奏年鑑』では、「オーケストラ」、「室内楽」、「ピアノ」、「歌劇」、「声楽（独唱）」の公演状況が都道府県別に整理されている。しかし、上述したように、コンサートはこれら以外にも、ヴァイオリンやチェロなどの独奏会、吹奏楽・合唱、和楽器演奏などジャンルは数多い。これら全

てを対象に東京・大阪・名古屋における2014年度のコンサート状況を検討していく。ただし、資料の都合上都市別ジャンル別の検討はできない。

2014年の1年間において、これら全ての公演数は東京23区は3,902、大阪は634、名古屋は715である。大阪は東京23区の16.2%、名古屋は同18.3%である。都市単位で見れば名古屋の方が多い。

東京23区の総公演数は東京都の86.9%、首都圏の66.1%である。大阪は大阪府の80.2%であるが、京阪神圏の36.8%にすぎない。名古屋は愛知県の78.8%、名古屋圏の67.3%である。都府県で見れば中心都市への集中率は東京23区・大阪・名古屋の順であり、そしていずれも高い。都市圏で見れば、中心都市への集中率は名古屋圏・首都圏・京阪神圏の順となる。とくに京阪神圏の相互補完性の高さが理解されよう。

## IV おわりに

以上、都市魅力について先行研究をふまえてコンサート会場とコンサート公演を指標として、東京23区・大阪・名古屋、東京都・大阪府・愛知県、首都圏・京阪神圏・名古屋圏という3つのレベルで検討してきた。

会場は増加を続けていることがわかったが、とくに大都市の外周部で増加傾向にあった。コンサート公演のジャンル別のまとめは省略するが、公演数は対象とした5年次いずれも東京23区・東京都・首都圏が多い。公演数は3都市・3都府県・3都市圏とも1995～2000年にかけては減少傾向にあったものの、2000～2010年にかけては増加傾向にあった。2010～2014年では少し減少した。

大阪と大阪府は減少傾向が続いていて、名古屋と愛知県を下回る場合すらみられた。都市圏単位で検討すると、大阪・京都・神戸をもつ京阪神圏の公演数は名古屋圏を上回るが、それでも1995年に比べると2014年では京阪神圏と名古屋圏の差は縮小していたことを指摘できた。それはまた、東京23区・東京都・首都圏の卓越度が高くなったことをも意味している。

名古屋の都市魅力については、本文中でも若干言及したように1980年代の「名古屋とぼし」のときに少し話題になった都市力という範囲まで広げれば、1964年の東海道新幹線の開通時のストロー効果が想起される。具体的には1970年に名古屋にあったアメリカ合衆国の領事館の閉鎖が大きな話題となった。同領事館の閉鎖の理由は米国の財政問題であって、必ずしも新幹線の開通が直接的な要因であったわけではない。それでも同領事館がわざわざ名古屋にある必要はないと判断されたのであろうことは容易に想像がつく。これを皮切りに高次な都市機能の多くが名古屋から逃げるのではないかと懸念された。新幹線を利用すれば簡単に東京へ行くことができるからである。

しかし、1986年3月にアメリカ合衆国の名古屋代表事務所が開設され、1993年12月に名古屋米国領事館に格上げされた。名古屋は一度失ったものを取り戻したわけである。取り戻せた理由は一言でいえば製造業に代表される「名古屋（大都市圏）の頑張り」である。

周知のように2027年にはリニア中央新幹線が東京―名古屋間で開通する。おそらく、また「ストロー効果」が懸念され問題になるであろう。しかし、頑張れば地盤沈下は起きないことは東海道新幹線の場合のように証明されている。リニア中央新幹線が大阪まで延伸されるのは2045年と言われている。ある意味、これはチャンスかもしれない。今、名古屋は十分に頑張れる力を持っている。引き続き努力をすることを祈念したい。具体的にはハードの点では、「なんでも使える会館」を増加させるのではなく、専用のホールの建設を心がけること、ソフトの点ではすばらしい演奏を「名古屋で楽しむ」仕組みをつくることを目指すことである。

## 引用文献

- 阿部和俊 1992 来日外国人アーティストの公演日程からみた地域間・都市間比較、地理学評論 65A-12 911-919
- 清水馨八郎・服部銈二郎 1970 『都市の魅力』 鹿島出版会
- 東海総合研究所 1993 「中部地域を代表する名古屋の都市イメージなどに関する調査報告書